

## パネルディスカッション

### 「若者の目に映る年金制度 ― いかに若者に語りかけるか ―」

パネリスト： 大阪経済大学経済学部教授 高橋 亘氏

ライフネット生命保険会長兼CEO 出口 治明氏

法政大学理工学部教授 中村 洋一氏

モデレーター：大妻女子大学短期大学部教授、年金リテラシー研究会主査 玉木 伸介氏



○玉木氏

改めてご紹介する。大阪経済大学教授の高橋亘様、ライフネット生命保険会長兼 CEO の出口治明様、法政大学理工学部教授の中村洋一様である。よろしくお願ひする。

大変駆け足で原理のご説明を申し上げたが、今までの話を若干補足する。お手元に『年金人生サバイバル問答』という資料があると思う。サバイバル問答という少し変わった名前と思われるが、これは若い方々に対して、何とかして年金不信から脱却して年金制度への理解を深めてほしいという気持ちを込めて、研究会内部で作ったものである。どう使ったかという、私は短大の教員で、パネラーの中には文科系の大学の教授と理科系の大学の教授がいるので、3種類の学生に『サバイバル問答』の最初の部分だけ読んでもらい、反応を聞いた。その辺りをこのパネルでまずお聞きしていきたいと思う。

最初に、出口会長に伺いたい。先ほど説明の中で私は保険という言葉を使った。特に、払っただけは戻ってこないという話をした。出口会長は保険会社の経営者として、被保険者から受け取っただけ被保険者に支払っていないわけだが、その辺りのメカニズムについて保険経営の立場からお話しいただけないだろうか。

## ○出口氏

これは当たり前のことであるが、保険はレバレッジ効果が一番の本質だと思う。少しのお金で、いざというときにはたくさん払われる。皆さんから少しずつお金をいただいて、それをプーリングし、本当に困った方にお支払いするのが保険の機能である。これは、生保も損保も変わりがない。そして、この仕組みを維持するための運営費がいるので、それもいただかなければならない。

私どもは、会社の運営費（付加保険料）を商品ごとに開示している。まだ小さい会社なので 20%を超える付加保険料をいただいている。できるだけ経費を節減するよう、メモも全部使用済みペーパーの裏面を使っているが、それでも 20%を超える手数料をいただいて 80%の部分でお客さまにお返しする構造となっている。これが、生命保険の基本原則である。玉木主査がおっしゃったとおりだと思う。

保険は、お金が返ってくるという神話で戦後販売されてきた。250 年前にロンドンで生まれた生命保険の原理は、全部掛け捨てである。



平たく言うと、死亡保険と生存保険・年金保険という大きく 2 つの種類がある。死亡保険は 100 いただいて手数料 20 を引いた 80 の部分を亡くなった方でお分けする。元気で生きている人は、基本的には元気でよかったということでお金は返ってこない。生存保険・年金保険では、例えば 60 才の時に生きていらっしゃる方で分けるが、59 歳でもしてお亡くなりになったら今まで払われた年金保険料は返ってこない。

そういう意味では、お金が返ってくるように見える年金保険であっても、保険の原理は全部掛け捨てが基本になっている。

## ○玉木氏

ありがとうございました。これが保険の裏表を全部知った方のご説明で、私の言ったことが当たっていたことが分かっていたかと思う。

どれぐらいの保険金になるのかということを考えてほしいと思う。あるいは、どれぐらいの長生きリスクがあるのかということを考えてほしいと思う。仮に 70 歳で引退したとする。今は長生きして 100 歳までいく人が結構いるので、100 歳までだとあと 30 年間ある。1 年間で 300 万円で暮らしても 9,000 万円かかる。その 9,000 万円の貯蓄を 70 歳までにつくれる人はごくわずかである。

私は学生に「君が一人っ子で、君の夫も一人っ子で、君の両親と夫の両親の合計 4 人がみんな 100 歳まで生きたらいくらかかると思う？」と、かなり厳しい質問もしている。こういうことを考えると、長生きリスクは個人の力では絶対に対処しようのないリスクであり、貯蓄では絶対に対処不可能である。これに対処するには保険しかない。これは当たり

前のことのような気がする。

この辺りを含めて、学生にいろいろなことを聞いてみた。先ほどの「年金人生サバイバル問答」の中にケース 1、2、3 とあるうち、ケース 1 という部分を、私の短大の学生、中村先生の理工系の学生、高橋先生の経済系の学生に読んでもらい、話をしてみた。

ケース 1 というのは、低所得のフリーターの方のケースである。この方は 1 号被保険者になるので、自分で手続きをして払い始めないと加入できない。今だったら月額 16,000 円ぐらい払わなければならないのだが、あるフリーターの方は、「みんな、これ駄目だって言ってるぜ」と言って払っていない。それを、知り合いのファイナンシャルプランナーの方が説得し、「そうか。分かった。入ることにしたよ」となる。こういう話である。

この話を読んで、学生の反応がどうであったのか、あるいはどんな議論があったのかということについて、両先生にお聞きしたいと思う。

#### ○中村氏

私のところでは、3 年生のゼミで、対話形式になっているケース 1 の役を割り振り、声を出して読んでもらった。先ほど太田記者からもご説明があったように、未納者が増えても、未納者には給付がないから年金財政には影響ないということが 1 つのメッセージだ。その点は理解できたようで、声を出して読んだあと「年金は大丈夫だろうか」と聞くと、「これなら破綻はしない」ということを 7 名全員が言っていた。

ただ、未納者が増えるということは給付を受ける人が減るということで、年金のカバレッジが小さくなってしまう。これは困ったことになるだろうから、やはり、政府の強制によって保険料を納めるようにするべきであるという意見であった。



#### ○玉木氏

高橋先生のところでは、どうだろうか。

#### ○高橋氏

太田さんが書かれたサバイバル問答は、対話の文章のでもあり非常に分かりやすい。学生も自分の問題に引きつけて年金の仕組みが理解できたようである。

一方、これまで学生が学んできた高校の教科書は、年金の仕組みの解説そのものではなく制度の問題点を強調する書き方になっている。一例を紹介すれば、

「(年金制度は)、いろいろな改革をして、保険料の引き上げや支給開始年齢の引き上げをしてきた。こういうものは、若い世代には負担増を見ることとなり、高齢者には給付減で老後の生活の狂いを生じてしまう。

このような世代間不公平が、給付水準の低下とあいまって年金制度の不信感を生み、制

度が空洞化するという悪循環を招いている。年金制度の抜本的改革が叫ばれている所以である」。

無論こうした記述は正しいわけだが、若者は年金制度には、非常に大きな問題があるということが頭に残り高校を卒業する。そこで改めてサバイバル問答を読むと、年金の仕組みが分かったということだと思う。

特に何が印象に残ったかと尋ねると、例えば仕組みの面では、保険金の免除。これができるのだと、苦しいときは払わなくても保険に入っていられることを初めて知ったと言っていた。また制度の面でも、国民年金の場合、半分は税金で賄われていることもあまり知らなかったようである。

年金については、玉木先生や太田記者の説明にもあったように、制度の問題ではなくて仕組みについて知ることが大事だ。サバイバル問答を読んだうえで、未納者には将来保険金が払われないといった仕組みを理解すると「先生、なぜ世の中では破綻論が言われているんでしょうか」という素直な疑問も出てきた。私はこれにはうまく答えられなかったが、「どうしてかね。ものごとの一面だけ話す経済学者が悪いのかもね」という話になる。

私は、年金について学生と話すときには簡単に3つのことを強調している。「社会保険なのだから保険」であるという点。何のための保険かという点、「長生きのリスク」に備えるため。3つ目は、「入っていないとどうなるか」。保険だから入らないという選択もあるが、入らないとどうなるかということを考えてみる。そうすると学生は自分の問題として捉えられる。仕組みを中心に自分の問題として考えていえば、年金も頭の中に入っていくのだということを実感した。



#### ○玉木氏

ありがとうございました。両先生から伺ったところでは、学生に対して説明してみると通るということだと思う。私も80何人の短大の学生に話してみた。これを読んでもらったら一応「分かった」という反応だったので聞いてみたところ、80何人のうち60人ぐらいは基本的には年金に対してネガティブなイメージを持っている。テレビや新聞などいろいろあるのだろう。

ネガティブなイメージを持つてはいるが、これは本当に「イメージ」だ。短大生が年金の1号、2号、3号について知っているはずがない。皆様ご自身が17、18歳のころを思い浮かべほしい。特に、昭和の時代に17、18歳だった方は、全く意識はなかったと思う。今の18、19歳の子たちがそんな意識を持っているはずもないけれども、それでもネガティブなイメージは持っているのだ。何か空気のようなものを吸ってそうなっているのだろうとしか思えない。

もう一つ。短大生に聞いてみたところ、8~9割の学生は、少子高齢化については中学校・高校の社会科で習った記憶があると言う。大事な問題なので、それはそれで大変結構なことだ。少子高齢化の知識は得たけれども、今までいろいろなことが言われている中で「年金というのは変なもの」、「飛び付くようなものではない」という空気を吸って、今の短大生や20歳ぐらいの若者の心の中というのは出来上がっているのだろうと思う。

この上で、彼らは20~22歳で社会人になっていく。正社員になる方は2号なので、これは自分で考える必要はない。所得税が取られるように源泉徴収されていく。私自身の例で申し上げると、就職したときに年金手帳を取得したはずなのだが退職するまで見たことがなかった。人事の部署で保管していたので見ていないのだ。退職するときに「これだよ」と言われて「そうか」と思ったぐらいで、全然意識も知識も必要なかった。

15~20年前まで、多くの人々は正社員として、2号として社会人になっていったケースが多かった。今は1号として社会人になる方も多い。この方々に対する説明をどこまでやっていくかということが、セーフティーネットとしての公的年金保険として非常に大事なことになっているのではないかとこのころだ。

ここをどうやったらリテラシーの向上に結び付けていくことができるのか。この辺が、おそらく非常に大きなわれわれの課題だろうと思う。そこまでは分かったとして、ではどうするかということだ。

年金というのは、いろいろな問題の結果であって原因とは必ずしも言えない。世の中をよくするためには年金をよくすればいいということではなく、世の中をよくしていかないと年金はよくなる。こういうことではないかと思う部分が多い。

そこで、出口会長にお聞きしたい。われわれが、若い人たちに対して年金をどう考えるかと言うときに、どんな心の持ち方をすればよいのか。政府や年金の大きな仕組みについてどういう心のスタンスを持っていけばよいのか。この辺についてお話ししたいと思う。

#### ○出口氏

今日のパネルディスカッションのテーマは若い人にどのように話すかということだが、先週たまたまある雑誌の方が取材に来られた。若い方で、年齢を聞いたら27歳だった。取材が済んだあと、「逆に聞いてもいいですか。君、ガールフレンドいる？」と聞いてみた。いるということだったので「結婚しようと考えているのか」と聞くと、「近い将来しようと考えています」と答えた。「彼女のご両親が、年金も健康保険も入っていなかったらどうする？」と言ったら、少し考え込んだ。「出口さん、彼女のご両親がもし病気になったり、年を取ったりしたら、みんな僕が面倒を見るということですよ」。『そうだよね』と言ったら、「ちょっと考えるかもしれませんね」と答えた。

そういうことだと思う。どんな貯蓄でもそうだけれども、何年ぐらいという目標があって初めていくら貯めればよいということが分かるものだ。普通の人なら、3年後までに頑張

って100万円貯めよう。3年後、100万円というゴールがあって初めて、毎月いくら貯めたらいいかということが分かる。しかし、ロンジェビティーというか、いつまで生きるか分からなければ、そもそもお金は貯められないだろう。極力衣食住をけちって貯めるということになると、これは経済的にもよくない。

そういうことを考えてみると、当たり前だけれども、年金であれ、社会保障であれ、日本という1つの国の経済がうまくいってパイが大きくなれば、分配できる分も大きくなる。それ以外の解はない。将来、この国がどのようによくなっていくかということが、実は年金問題の全てであり、それは、年金をよくしたから社会がよくなるのではなく、本当にこの国がよくなったら年金もよくなるから、みんなで知恵を出そうということだと思う。

現在の状況で一番にやるべきことは被保険者の適用拡大だ。

僕は、「1号被保険者（国民年金）は八百屋さんの年金だ。70歳になっても働ける。だから、ある程度少なくともいい。でも、人に使われている人はそうではない。年を取ってから急に八百屋はできないから手厚くなっている」と教えられた。そうであれば、政府ですらこれからは労働時間ではなく成果で見ると言っている世の中なので、短時間であってもパートであってもアルバイトであっても、人に使われている人は全部2号被保険者にする。1,000万人単位で適用拡大していくことが一番いい方法だと思う。

もう一つ。よく議論するときに「政府はけしからん」と、つい話してしまう。確かに、けしからんことが最近多いような気もするけれど。しかし、外国人の友人と議論していてこんなことを言われた記憶がある。「お前ら、えらく政府に文句言ってるな。でも、メディアも含めてみんな政府に文句言っているわりには、投票率は先進国・G7で一番低い。これ、おかしくないか」。

僕が思うに、われわれ市民と政府は対立物だという、市民と政府が対立しているという考え方は捨てるべきで、明日の政府は僕ら市民がつくる。今の政府が悪かったらつくり変えればいい。その気持ちをもっていないと世の中おかしくなる気がする。



○玉木氏

ありがとうございました。今の出口さんのお話の冒頭で、結婚しようか考えてしまうという話があった。これは、たぶん若い記者の方が、自分が直面しているリスクに気付かされたということだと思う。この辺で、中村先生と高橋先生にお聞きしたい。若い人にこういうリスクがあると示してあげたとする。そうすると、それを理解して、社会保険などに関するイメージを変える素地はあるのかということだが、この点、高橋さんからいかがだろうか。

○高橋氏

先ほど言ったように、その点はあると思う。もう一つ、サバイバル問答で学生の頭に残ったのは、未払いの人の割合が意外と少ないという点だ。2号の人はみんな払っているので、1号の中で未払いがいても、全体では25人に1人程度しか未払いがないという記述があったが、こうした客観的事実もあまり知られていないようであり、こうしたことを知れば、年金に対する見方も自ずと変わる余地はあると思う。



○玉木氏

ありがとうございました。中村先生、いかがか。

○中村氏

先ほど、学生全員が破綻しないと答えたと申し上げたが、これはサバイバル問答を読んだ直後に「どう思う？」と聞いたときの結果だ。このパネルディスカッションに備えてもう少し聞いてみた。この研究会の最大のメッセージである「年金は掛け捨ての長生きリスク保険」ということについてどう思うかと聞いたら、これは意外だったのだが、「保険だったら民間でやるべきなのではないか」という答えが半数を超えた。民間では終身に渡って所得保障することができないと言っても、「何とかできるような保険をつくるべきではないか」という意見であった。

年金とは、早く亡くなる人の保険料を長生きする人へ給付する仕組みである。「これはいい仕組みだと思うか」と聞くと、「よいとは言えないけれども、仕方がないだろう」。それから、「世代間で負担と給付が異なることについてはどう考えるか」と聞くと、「人口の年齢構成によるものだから仕方がないということは分かるのだが、それを当然のこととして受け入れることは無理がある」。つまり、「ある程度負担と給付は世代間で平等であるべきだ」というような意見があった。

積み立て方式について。玉木先生から解説があった「積立金の取り崩しが現役世代の負担になる」という話。これについてどう思うか聞いた。「それでも、積み立て方式であれば現役世代が資産を獲得するわけでしょう。それを次世代に売ればいい」という。次世代はいないから売れないわけであるが。もちろん、積み立て方式はインフレに弱いということも理解はしている。それでも、積み立て方式にもいい点はあるのではないかということだった。



なるべく学生の認識の現状を把握したいと思ったので、

「深く考えるな。直感で答えてくれ」と言ったら、このような答えが出てきたわけである。このように、学生の認識はフワフワしたものなので、われわれの提言が、サバイバル問答が持ったような効果を学生に対して持つことを期待したいと思う。

#### ○玉木氏

ありがとうございました。両先生のご経験からすると、若い方々にある程度の刺激を与えるとみんな自分の頭で考え出している。大変頼もしいと思う。こういった方々にあまり色の付いた空気を吸わせる前に、もう少し自分の頭で考えるための原理的な道具立てをいろいろ提供していくのが、私も含めた教員や大人の義務ではないかと思う。

先ほど、出口さんからみんなで投票してという話があった。この辺について、私が自分の学生に対して頭の下がる思いをしたことがある。昨年か一昨年の学生だった。短大生なので2年生で20歳になる。生まれた月の早い子は在学中に選挙があった。「今度選挙があるからちゃんと行けよ」と言うと、「先生、私はもう期日前投票してきました」という子がいた。期日前投票の手続きを自分で調べて行ってきたという子が、私の学生でいたのだ。

20歳のとき、ほとんど人間というよりは獣に近かった私としては、期日前投票なんか全く考えたこともなかった。そんな意識は全然なかったのだが、ある程度の刺激を与えると、今の若者たちも立派に日本国民として機能しそうだという感じはする。そういった意味も含めて、この年金制度についてははじめに結論ありきのような空気を吸わせるのはいけないだろうと思う。

中村先生の学生の中から「民間でやったほうがいいのか」という議論があった。これなどは理性的に考えて民主的な手続きでもって決めればいい話で、おおいに議論すればいい。これは空気ではなくて論理・理性、あるいは価値判断でもって行われる議論として構成可能だと思う。

「不公平だ」「潰れる」ということや、太田記者の話にあった研究者や主張に対して中身と関係ないレッテルを貼るのはいかがなものかということも、強く感じるところだ。この辺り、もう少し考えていくべきところがある。そうなってしまったのは、今ここにいる方々を含め40歳以上の人間の責任かもしれない。私は今59歳であと50年ぐらい生きるつもりでいるので、あと50年ぐらいはこういった若い世代への負のレガシーを残さない方向で務めてまいりたいと思う。





○出口氏

先ほど中村先生の言われた「民間にやらせればいいのではないか」ということについて一言だけ申し上げておく。全世界で生命保険会社は生命保険や年金保険を売っている。しかし、生命保険というのは衣食住の次に来るものなので、新興国がテイクオフしないと売れない。つまり中間層が生まれて、初めて生命保険は売れるのだ。皆年金や皆保険を民間でやることは原理的には可能であるように見えるが、保険や医療が本当に必要な貧しい人は衣食住が精一杯で、保険料が払えないという構造的な問題がある。これがたぶん根源的な問題で、世界の生命保険会社の経営者の99%は、公的年金や公的医療保険は民間保険では代替できないと考えていると思う。一言だけ付言させていただく。

○玉木氏

パネルディスカッションはこれぐらいにする。休憩時間を経て、今度は模擬授業を行う。模擬授業については、高校の社会科の授業という設定である。だからといって、週日の昼間に高校生を呼んでくるわけにはいかないの、私の学生を数人壇上にあげる。彼女らが一番最近まで高校生だった人間なので、その方々にどういう説明が届くのか。この辺りをよくご覧いただければと思う。

どうもありがとうございました。